

10 世俗化の時代としての近代

前回のまとめ

前回は、権力のあり方が「死なせる権力」/「可視的存在」から「生かす権力」/「不可視的存在」へと変わったことをM・フーコーの「監視と処罰」に関する議論を通して学んだ。それによれば、「パノプティコン」と呼ばれる監視施設の原理は人間を作り、教育し、強制、監視するための多くの近代制度・施設に応用されたのである。それによって、近代的な個人は決して自分一人で主体になっていくのではなく、「規律」と「監視」の構造を内面化することによって、規範(=社会)に従属することで主体となるとされた。

今回の主題

今回は、合理化傾向を強める近代社会の一面をより深く理解するために、過去の伝統社会のなかで圧倒的な影響力を持っていた宗教の力が弱体化する傾向を指す「世俗化」という概念について学ぶ。「計算可能性」や「予測可能性」を重視する「合理化」の影響で、次第に宗教の影響力が失われ、今や一個人の選択の対象となった(宗教の私事化)。

KEYWORD

宗教

合理化

脱魔術化

世俗

宗教の私事化

「宗教」概念の前提としてのキリスト教

- ・一般的に「宗教 (Religion)」を扱う際に、多くの場合はmonotheism (唯一神) 観を基準に、または前提にして語られている。
- ・「religion」の訳語として「宗教」という語が社会に定着するのは明治以後である。
- ・キリスト教を宗教理解の基準にした結果、神道や儒教や民俗宗教が「宗教」の外に置かれることもまれではなかった。

「宗教」の一般的な意味

- ①社会的制度 (institution)
- ②この制度を維持するための手段としての教理 (doctrine)

翻訳語としての「宗教」

religion

『スタンダード英語語源辞典』(下宮忠雄他編、大修館書店、1989年)によれば、ラテン語の「religiō, religiōnis(神聖な義務、信心深いこと、敬神)」**「religāre(固く縛る、後へ結ぶ)」****「Re(再び) + ligāre(結ぶ)」**から派生したとある。

『シップリー英語語源辞典』(大修館書店、2009年)によれば、ラテン語「religens(注意深い、没頭した:ラテン語で「re-」は“再び”)」は「繰り返す繰り返すそれに戻ってくる」ことを表し、この態度が名詞「religio、religion(献心、良心、不安、勤行、拘束力)」に表され、英語religion(宗教)の語源となった。

宗教

もともと仏教用語であった「宗教」という漢語そのものは、『望月仏教大辞典』によれば、**「宗の教旨、或いは宗即ち教の意。又宗と教との併称」と**ある(望月信亨『望月仏教大辞典』第三巻、世界聖典刊行協会、1954年、2229～2230頁)。

仏教語の「宗教」とは「宗」の「教」、または「宗」と「教」という二語から合成されたもので、仏教の各宗派の教えを意味していた。

Religionの翻訳語として「宗教」「宗旨」「宗門」「法教」「教法」「教門」「聖道」などが用いられたが、「1874年『明六雑誌』では森有礼が「宗教」と題する論文(『万国公法』英語版からreligion)に関する部分の訳を公表し、福沢諭吉も1875年『文明論之概略』から「宗教」という語を本格的に使い始めている。明治10年代に出版された著訳書で、知識人たちはキリスト教を中心に「宗教」を論じた。

Monotheism(唯一神観)の特徴

- ①唯一神観念は、その神を信仰する民族の神、闘争の神に由来する。キリスト教の『旧約聖書』に見られるように、そこに登場する神はあくまでも民族と神の関係であり、決して個人と神の関係ではなかった。
- ②唯一神観念は、客観的にみれば、一つの神しか存在しないという意味ではなく、多くの神々のなかで特定の民族が崇拝する特定の神を唯一の神として崇拝することを意味する。そのため、「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない」(『旧約聖書』「出エジプト記」20:3-17)のように、ある種の排他性を伴う。
- ③唯一神観念は創造論を同伴する。そこから論理的に創造者と被造者の区分と対立が生じる。また聖と俗の問題も同伴する。後に、制度的装置によって聖を専担する聖職者層が発生する。(聖職者階級が分化されてない文化がかつては多く見られたが、そこでは生活世界のなかでともに生きていながら、祭りなどを主催する際にのみ、特別の役割を担う)。

「宗教」に関する二つの主要な論点

神
(GOD)

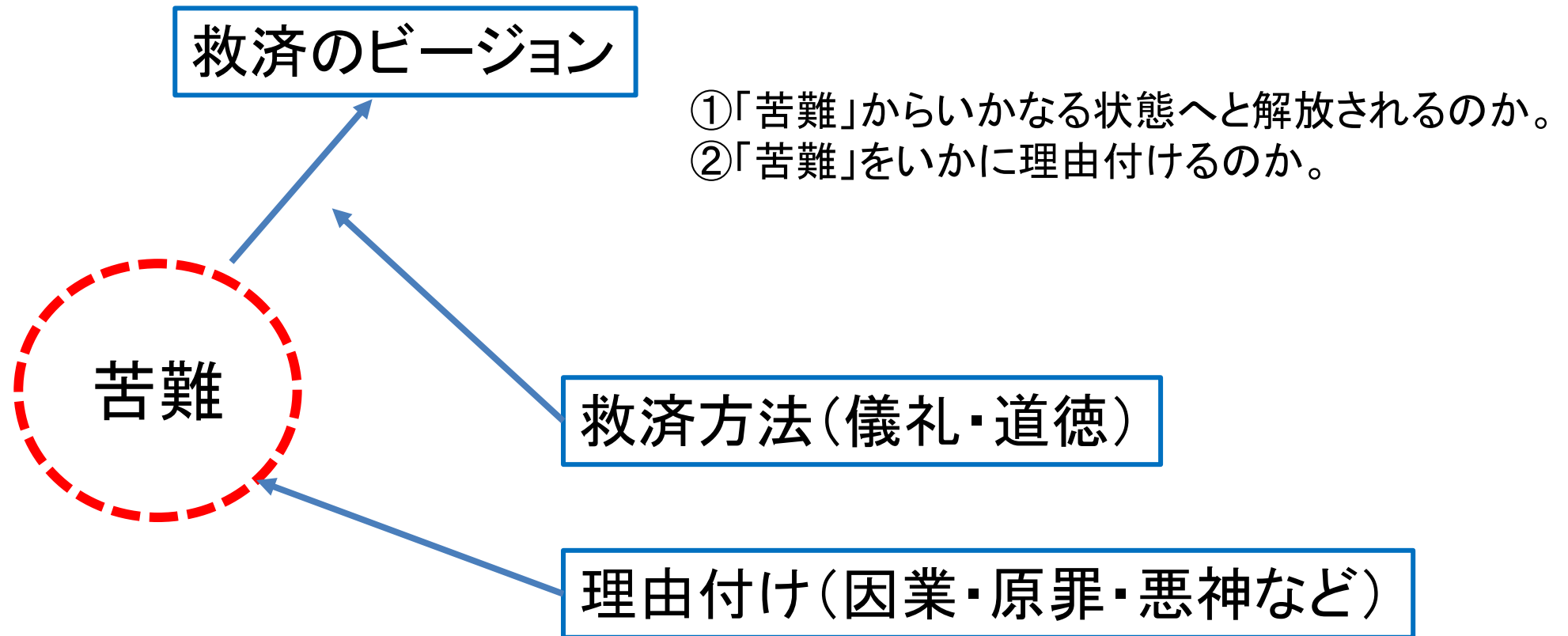
①
超越
(transcendence)

②
救済
(salvation)

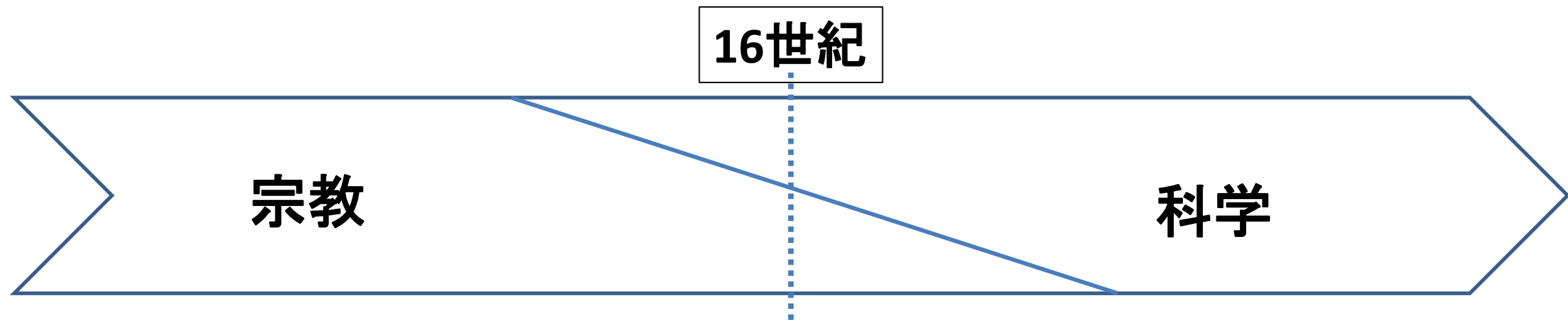
- ・超越者が人格化、または超自然的な存在されている場合が多い。(つまり、自然の因果で説明できない力を持っている)
- ・聖＝絶対的他者(日常的経験をもって説明、言語的記述ができない他者)との出会いによって、日常的現実世界の価値が転倒する。

- ・最初は、物理的な次元での救済(自然災害、伝染病、戦争、悪政など)
- ・「～からの救済」から「～への救済」(内面的な、精神的なものへ)
- ・救済のための儀式、儀礼などの制度化

「苦難」への二途の対応



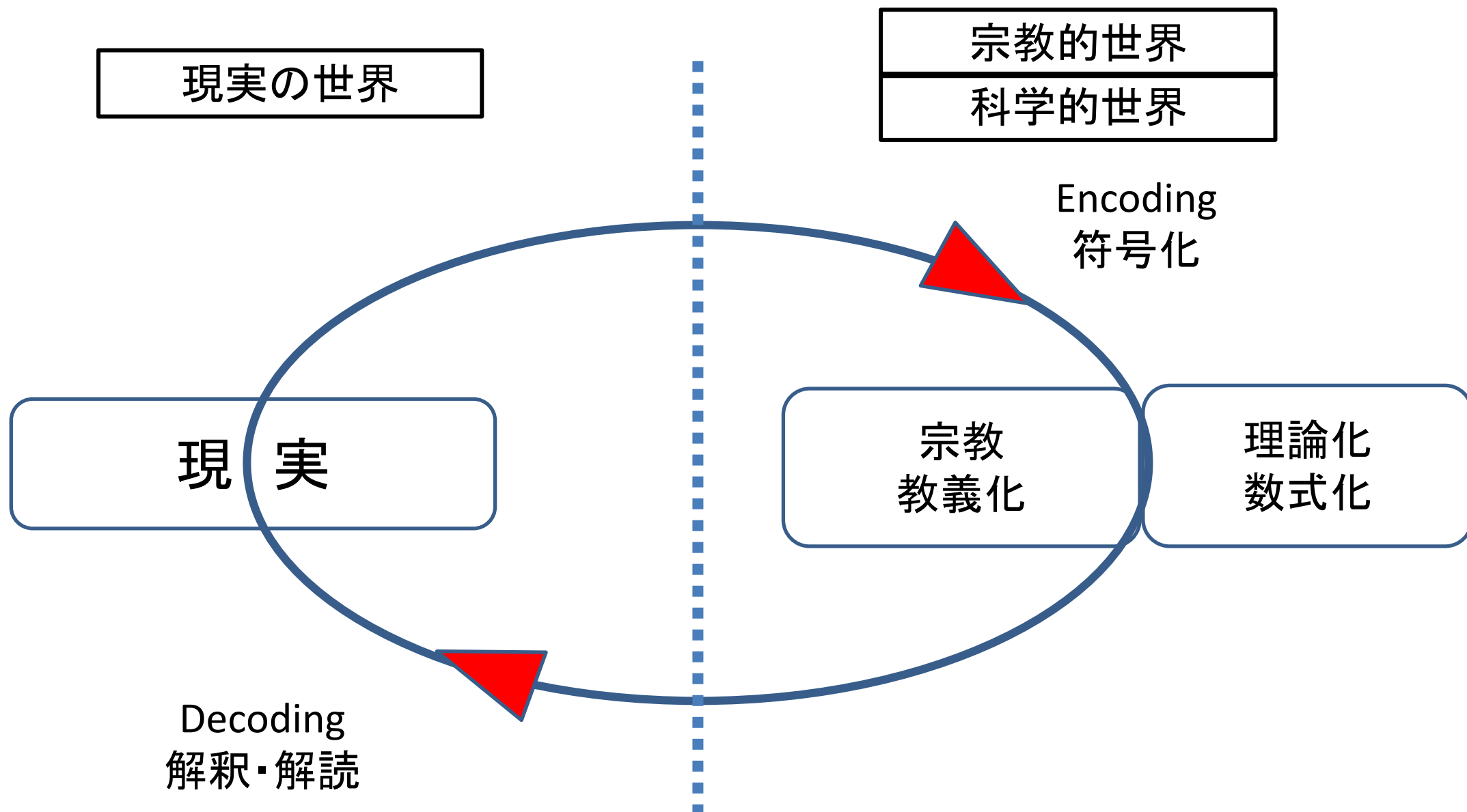
神学的世界観から科学的世界観への変化



人々の第1次的世界観・意味付与
人間の活動に含まれている「前提」に対する探求

Rom Harre "One thousand years of philosophy", (2000)

- ・科学＝ある現象をもたらした原因（因果的力）として実在する構造を探ること（実験活動）
- ・科学的活動は人間の活動であり、人間の認識能力を通して行なわれる。その認識能力とは、具体的に（経験論）と（合理論）をさす。



***社会科学の前提: 社会(社会構造)は因果的力として作動している実在または構造であるという前提に立つ。この前提を認めないとするならば、社会は自然、または個人に還元される。

世俗化(secularization)

参考文献

P.L.バーガー『聖なる天蓋—神聖世界の社会学』
(園田稔訳、新曜社、1967=1979年)

- ①「〈世俗化〉という言葉は・・・元来、いわゆる宗教戦争の余波のなかで、教会権威のコントロールからその領地または財産を解放することを意味して採用されたものである。」(162頁)
- ②「世俗化とは、社会と文化の諸領域が宗教の制度や象徴の支配から離脱するプロセスである。・・・教会と国家の分離、教会領地の公的接收、教育の教会権威からの解放・・・芸術、哲学、文学の領域で宗教的内容に脱落が見られ、・・・世界に関するひとつの自立的で完全に世俗的な構想としての科学の抬頭のなかに見出される。」(165頁)
- ③社会構造レベルでの「客観的世俗化」＝「経済上の世俗化」・「国家や家族の世俗化」
- ④意識の世俗化としての「主観的世俗化」＝世界と自分の人生を宗教的な解釈の恩恵なしに眺める態度を指す。
- ⑤総じていうならば、世俗化とは過去の伝統社会では圧倒的だった社会に対する宗教の力が近代社会において弱体化する傾向を指す概念である(ただし、宗教内の聖職者や信徒の墮落を指す用語ではない)。

【用語解説】「世俗化 (secularization)」

- ①一般的な用法は、神聖化の対概念として用いられる。ある社会で「聖」とされるものによる社会制度や人間生活全般にわたる拘束 (宗教) が、「世俗的」な規制の形態に置き換わっていく一つの社会過程。一般に歴史はこの方向に進むものとみなされている。
- ②俗化とはかつて神聖であったものがその威光を失い、後の時代には俗なもの、人間に支配されうるものとみなされるという歴史的変容を表す。例えば聖書を初めとする諸宗教の聖典は、現在ではもっぱら歴史学的文献学的研究の対象とみなされる。

一般には宗教や形而上学の超越的な価値や権威が、内在的な諸観念にとって代わられる近代世界の生成をさす。その決定的な契機としては、理神論的な世界像の成立があげられるが、より持続的な影響力を与えたのは宗教改革である。シュミットによれば、世俗化の過程は、文化の中心領域が神学→形而上学→経済→科学・技術へと移行する「中立化」の進展を意味しており、その帰結はニヒリズムの到来として描かれる。世俗化の深化とともに、いわゆる「意味問題」が発生し、価値の多神論的な状況が現われてくることについては、M.ウェーバーが洞察している通りである。ただ、世俗化は単に超越的価値の世俗的自己疎外への転換にとどまらず、「空席になった回答者の地位の役割変更」(ブルーメンベルクHans Blumenberg)として記述されるべきであり、転換と配役変更の二重の視点からその問題が論じられるべきである。

姜尚中「世俗化」(見田宗介他編『社会学事典』弘文堂、1988年、554頁)

「合理化」と「脱呪術化」

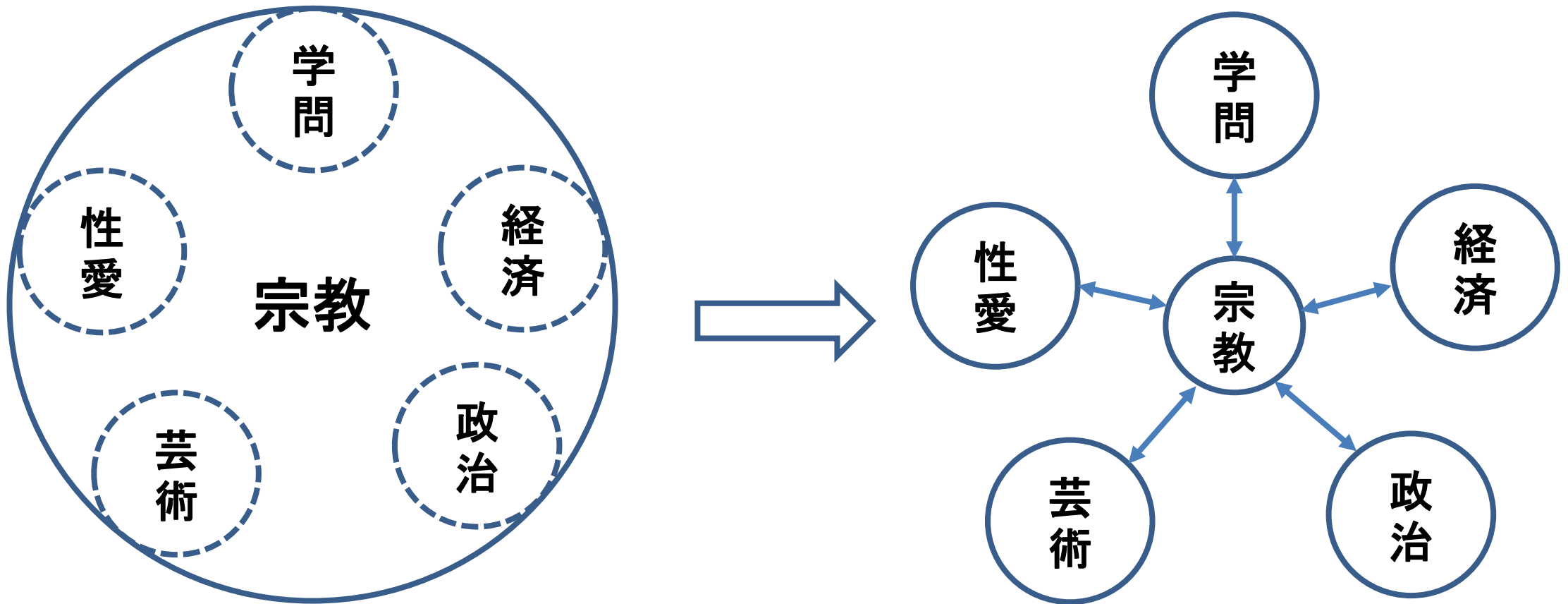
① 合理化 (rationalization)

Max Weberの用語を使えば、「脱魔(呪)術化」、「主知化(科学的に把握できないものを排除)」、「理解化」であり、一般的には、社会的行為とそれに妥当な根拠を提供する正当性において、「**計算可能性 (calculability)**」を重視する傾向を指す。すべての社会的行為において目的と手段の合理性を強調し、これを通して、「**予測可能性 (predictability)**」を高める。

② 脱呪術化 (脱魔術化)

宗教の領域で起きた合理化過程を指す。人びとを動かす呪術的、迷信的要素を排除しようとしたプロテスタントたちによって始まり、次第に宗教の領域を超え、社会のあらゆる領域において呪術的、神秘的な要素を排除。ここでも合理化と同じく**予測可能性と計算可能性**が圧倒的な力を帯びる。

伝統的時代から近代的時代へ 分化/世俗化



マックス・ウェーバー「中間考察」『宗教社会学論選』（大塚久雄他訳、みすず書房、1972）
図の出典は、横田理博「ウェーバーにおける宗教展開のダイナミズム」『状況』2000,7月号、91頁

「社会(society)」における「宗教(religion)」の役割

Religion = Re (again) + Ligio → ligare (束ねる)

人名	宗教のとらえ方	代表的著作
Emile Durkheim	「宗教と社会統合」	『宗教生活の原初形態』(1912=1975)
Max Weber	「宗教と社会変動」	『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1905→1920=1989)
Karl Marx	「阿片としての宗教」	『ヘーゲル法哲学批判序説』(1844)
Peter Ludwig Berger	「聖なる天蓋」	『聖なる天蓋』(1967=1979)
Thomas Luckmann	「宗教の私事化・個人化」	『見えない宗教-現代宗教社会学入門』(1967=1976年)

Emile Durkheim:「宗教と社会統合」

- ①社会の秩序維持に本質的な役割を担ってきた。
(社会の連帯力(solidarity; 統合力)として作用)
- ②人や社会、世界などに意味を付与した。



集団表象; 社会の心性(Mentality)

「宗教」の構成要素＝「超越的な神」・「信仰」・「儀礼行為」

社会の「秩序」の本質 = ①(信賴) ②行為

M・ウェーバーのカリスマ概念が示しているのは、宗教のもつ社会変革機能である。この点で宗教は本質的に「**運動**」なのである。彼によれば、「近代(社会)」は、或る特殊な宗教的に動機づけられた人間的エネルギーの社会的放出の「**思わざる結果**」として成立した。つまり、カトリシズムの教会主義に対抗したプロテスタントたち「**現世内的禁欲主義**」が宗教時代の西欧社会を激変させて近代を形成する原動力となった。

「[禁欲的プロテスタントの]この禁欲的な生活のスタイルは、神の意志に合わせて全存在を合理的に形成するということを意味した。しかも、この禁欲は救いの確信をえようとする者すべてに要求される行為だった。こうして、宗教的要求にもとづく聖徒たちの、「自然の」ままの生活とは異なった特別の生活は—これが決定的な点なのだが—もはや世俗の外の修道院ではなくて、世俗とその秩序のただなかで行われることになった。このような、**来世を目指しつつ世俗の内部で行われる生活態度の合理化**、これこそが禁欲的プロテスタンティズムの天職観念が作り出したものだった。

(『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波文庫、286-287頁)

P.L.バーガーのいう「聖なる天蓋」とは人間社会の規範を究極的に正当化している宇宙的な神聖秩序を伝統的なイメージで表現したものである。

宗教は「聖なる天蓋」として社会全体をすっぽり覆い、その全過程を究極的に意味づける象徴の体系であり、このなかに個人を位置づけ、アイデンティティを与える機能を果たした。

P.L.バーガーは宗教を含む意味秩序の動きに関して、「カオスーノモスーコスモス」という三次元を提示する。

- ・「ノモス」＝日常的なレベルで共有された共同の規範に基づく意味秩序
- ・「カオス」＝意味づけ不能は混乱・混沌（自然の猛威・災害など）
- ・「コスモス」＝ノモスとカオスを中和して媒介するような意味世界（聖なる感覚をとおして、不安定化するノモスを宇宙的な思考の枠組みのなかで再解釈した意味世界。例：自然災害＝神の意志、たたり）

**ノモスにおける不安定性はコスモスという「聖なる天蓋」によって覆われることで、安定したものとなっていく。このようなコスモスとして、位置づけられたものが、神的存在を支柱に構成される宗教や神話なのである。

Karl Marx:「阿片としての宗教」

カール・マルクス「ヘーゲル法哲学批判序説」(『新訳 初期マルクス「ユダヤ問題に寄せて」「ヘーゲル法哲学批判序説」』的場昭弘訳、作品社、2013年、237～240頁)

宗教をつくるのは人間であり、宗教が人間をつくるのではないということである。しかも、宗教は次のような人間の自己意識であり、人間の自己感情である。すなわちいまだ自らを獲得していないか、あるいはすでに一度自らを失ってしまっているかのどちらかの。

・・・宗教はこの世界の一般理論であり、世界にとって百科全書的な意味をもつ概説書であり、世俗的な形でのその論理学であり、その精神的な面子であり、その情熱であり、その道徳的認可であり、その祝祭的な補足であり、その一般的な、慰めの、正当化の基礎である。宗教は人間の本質を幻想的に現実のものとするものである。

・・・宗教的貧困は、現実の貧困の表現の中に、現実の貧困に対する抗議の中にある。宗教は困窮した人間のため息であり、宗教は精神なき状態であると同じく、心なき世界の感情である。宗教は人民の阿片である。

人民の幻想的な幸福としての宗教を廃棄することは、現実の幸福を要求することである。自らの状態についての幻想を廃棄することは、幻想を必要とする状態をやめることを要求することである。

- ①「再び結び付ける」の意味をもった「religion(宗教)」は、伝統社会ではあらゆるものに究極的な意味を付与していたものであった。
- ②人間の社会はそのまま宗教的社会でもあり、宗教と社会が分化していなかった世界では、宗教の歴史は個人的選択の歴史ではなく、集団的伝承の歴史であり、けっして宗教個人的な選択の対象ではありえなかった。
- ③「計算可能性」や「予測可能性」を重視する「合理化」(主知化、または「脱魔術化」)の影響で、次第に宗教の影響力が失われたことを指す概念が「世俗化」である。
- ④20世紀にはじめて、宗教が純粹に個人の選択の対象となった。この変化は人類史上最も大きい変化の一つである。現代社会における宗教は、個人的な選択の対象となり、デパートの陣列商品化された。このことは、宗教の領域だけに限定されない。すでに6回「社会契約論と私的所有論」でも取り上げたように、近代はかつての「共通(公共)」なものを「私事化」することで、共通の関心事を私的なものに置き換える一面を持っている。